

「觀經弥陀經集註」の研究

森 田 真 円

一、従来の研究と問題点

昭和十八年の寺宝調査で、表紙も奥書もなく行間紙背等に諸師の註疏を書き入れた古写経が、親鸞の真蹟として認められ、翌年「觀無量寿經集註」「阿弥陀經集註」と仮題して影印された。爾来、本書は親鸞の浄土教研鑽の私的な研究ノートとして注目されている。したがって、本書はその研究の成果によつては(一)親鸞がどのような状況下で浄土教の典籍を研究されたのか(二)法然門下における親鸞の位置はどのようなものであつたか等の問題の重要な鍵となり得る。

また、本書は「選択集」と「教行信証」との間にあるともいえる。「教行信証」の二つの問答に見られる親鸞の問題意識は、法然門下諸師の念仏や信心の理解と深く具体的に関連していると考えられるが(拙論「信巻三二問答設問の意義について(1)(2)」参照)、「選択集」を受けた親鸞がどのように「教行信証」へ展開していくかを知る手掛りを本書は示している。そ

の意味で、(三)法然門下諸師の觀經・阿弥陀經理解とどのような同異が既に見られるかを本書を通じて窺うことは意義深い。ここでは、それらを念頭におきつつ、(一)の親鸞の浄土教研鑽の状況を知る基礎的作業として、本書の經文の定本の問題を若干考究したい。

従来の研究によれば、本書の製作年代については宗曉(一五一一〜一二二四)の編集した「楽邦文類」と善導の「般舟讚」が注目される。まず「集註」に朱書される「楽邦文類」は中国で慶元元年(一二〇〇)に公刊されたもので、その後日本に将来されたと考えられている。但し、この将来の時期や親鸞が朱書した時期については諸説あつて問題が残る。次に「般舟讚」は建保五年(一二二七)―親鸞四十五歳―に仁和寺で発見されたが「集註」には引用されていない。これらの点や「集註」に見られる親鸞の書風等から、製作の年代は法然膝下時代から親鸞四十五歳までの間という説が有力である。

また元照の「阿弥陀經義疏」や前掲の「楽邦文類」の引

用、本書使用の字体等から親鸞の宋代浄土教受容についても注目されている。法然門下の中で宋代の浄土教受容に積極的であったのは親鸞と長西と良忠であるが、親鸞が最もよく消化摂取したとも言われている。小川貫弍氏は「集註」に多く見られる新しい宋朝文字は親鸞の宋朝文化への傾倒を示すものと指摘される。しかし、それ故「集註」の製作について「日宋交通の漸く盛んとならん鎌倉前期に、宋朝諸師の釈文をはじめ宋朝の新しい文字を自由に使用される点」を問題とされ、本書が「東国の経廻から帰洛に近い頃」に製作されたのではと推論されることも注意したい。

二、「集註」の「觀經」の経文について

「集註」の所々に親鸞の校異の跡がみられるが、どのような系統の定本や異本を参照して経文を確定されたのか現在のところ明らかではない。既に禿氏祐祥氏が影印版の解説において指摘されるように本書の経文は現行の流布本と相違するところが少なくない。

そこで注目されるのが宋版の大藏經の将来である。平安時代から鎌倉時代にかけての日本では、末法思想の昂揚につれて、写経が救済を得る贖罪符と見なす風潮が普及したため、一切経会（一切經の書写・奉納）が流行し、それが背景となつて宋版の大藏經の将来が盛んとなった。また、宋朝の最初期

は所謂禁書政策によつて書物の輸出が制限されるが、少しづつ国外に流出し、南宋になると国威の低下によつて制限は緩み、多くの書物が民間貿易等によつて朝鮮や日本に渡来した。

宋版の大藏經は北宋の政策の一つとしてなされた開宝勅版を嚆矢とし、以後数百年に亘つて数種類の雕印がなされている。ここでは次の四種類を挙げることにする。

(1) 福州東禅等覺院版（宮内庁図書藏）

北宋福建省東禅寺の冲真等の発願によつて元豐三年（一〇八〇）と政和二年（一一二二）にかけて完雕。

(2) 湖州思溪円覺禅院版（大谷大学藏）

南宋一切経。王氏一族の喜捨によつて紹興二年（一一三二）頃より雕印されたが完雕年時は不明。

(3) 平江府砂砂版（龍谷大学藏）

願主や起源は不明である。最も古い刊記は紹定四年（一二三二）であるからこの頃の着手かと考えられている。

(4) 高麗再雕版（高麗大藏經）

高麗の高宗二十三年（一二三六）と高宗三十八年（一二五二）にかけて顯宗朝（一〇一〇～一〇三二）の初雕版を再雕。内容的には初雕版を受ける。

この四つの版本に（5）大正大藏經を加えて、「集註」と比較校合したものの一部が左表である。大谷大学藏の思溪版の

表(A)

經題		帖
二四	仁慈 願 生經七日	觀經集註
1	仁義 大願 經七日己	東禪寺版
2	得須陀洹 過一小劫	思溪版
3	過一小劫	磧砂版
4	過一小劫	高麗版
5	過一小劫	大藏經正
6	過一小劫	
二六	數 仏告 此 者 稱 往生 開 諸法実相説	
1	S	
2	S	
3	S	
4	S	
5	S	
6	S	
7	S	
8	S	

「觀經弥陀經集註」の研究(森田)

「阿弥陀經」が散逸していたこともあって「觀經」二十八帖に
限って校異した。記号Tは東禪寺版と同じ、記号Sは「集
註」と同じ、記号#はそれのみが「集註」と同じという意味
である。

以上の校異箇所は全部で二百余箇所になる。異体字・音通
等問題の残るところもあるものの全般的な傾向は把握でき
る。次表に基づいてそれを述べることにする。

表(B)

- (1) 東、思、磧、麗、大が共通でかつ集と相違……………二九
(2) 東と集との相違……………五九
(3) 思と集との相違……………一〇二
(4) 磧と集との相違……………六六
(5) 麗と集との相違……………一三二
(6) 思、磧、集が共通で他と相違……………三〇
(7) 東、麗、集が共通で他と相違……………五
(8) 磧のみ集と共通で他と相違(#)……………三〇
(9) 東のみ集と共通で他と相違……………一
(10) 思のみ集と共通で他と相違……………一
(11) 麗のみ集と共通で他と相違……………〇
まず東禪寺版や高麗版と「集註」とを比べると、表(B)の
(2) (5) が示すように相違するところが多い。しかも、表
(A) 二四帖の6に見られるように、東禪寺版と高麗版は「觀

経」の初観、二、四、五、八、十一、十五観の末尾が「作是観者」等十六字から二八字分多くなっている。

次に思溪版や磧砂版と「集註」とを比べると、表（B）の（3）（4）が示すように東禪寺版や高麗版よりも「集註」に近い。なかでも磧砂版は他に比べて「集註」と相違するところが少ないと言える。

また、注目すべきことは表（B）の（8）が示すように、磧砂版だけが「集註」と一致して他とは相違するところがある（三〇箇所）ことである。これは同じ比較を他の三版でした表（B）の（9）（10）（11）を対比すれば明白である。

しかも、「集註」と磧砂版は「睡時」として他版は「食時」とする（七帖）とか、表（A）二六帖の8のような文章内容に關するところで磧砂版のみが「集註」と一致することが多い。

以上のことから宋版四版の中では、東禪寺版や高麗版と「集註」の経文は系統の違うものであり、磧砂版が最も「集註」の経文に近いと言える。

三、 結 び

以上考察したように、「集註」の経文には独自のものがある。問題は残るとはいえ、宋代の浄土教並びに宋朝文化に進

取的であった親鸞の態度からしても、「集註」と宋代大藏經との関係は否定できないであろう。中でも磧砂版が他版に比べて「集註」に一層近いことから、親鸞が磧砂版かその系統のものを参照せられたと言わざるを得ない。この磧砂版の雕印の起源や日本への将来の時期が定かでないので一概には論ずることはできないが、もし磧砂版の雕印や将来が最古の刊記紹定四年（一二三二）に近いものであるならば、「集註」の製作年代にも大いに関わつてくると言える。

それについて「集註」に散見する親鸞の校異の中で注意するものがある。それは表（A）二四帖の2で示した「願」の字のところにある頭註である。この「願」の字は「集註」と磧砂版のみが一致し、他版は全て「大願」となっていて、先述した「集註」と磧砂版が近いことを示す一例である。ここに「古本大字」と読める朱書の校異がある。したがって、親鸞が採用した新しい本と磧砂版とが一致することになる。つこのような例は他にもあり、磧砂版は他版よりも比較的新しいものと言えるが断定はできない。ここでは、「集註」の製作年代が従来よりも遅くなる可能性もあるという程度に止めておきたい。なお、紙面の都合で註は略した。

（龍谷大学講師）